

(19) 日本国特許庁(JP)

(12) 公開特許公報(A)

(11) 特許出願公開番号

特開2004-236875

(P2004-236875A)

(43) 公開日 平成16年8月26日(2004.8.26)

(51) Int.Cl.⁷

A45C 3/00

A45C 13/00

F I

A45C 3/00

A45C 13/00

M

P

テーマコード (参考)

審査請求 未請求 請求項の数 2 O L (全 5 頁)

(21) 出願番号 特願2003-29558 (P2003-29558)

(22) 出願日 平成15年2月6日(2003.2.6)

(71) 出願人 398066055

株式会社羅羅屋

東京都港区芝浦3丁目5番25号

(74) 代理人 100084353

弁理士 八嶋 敬市

(72) 発明者 村上 雄一郎

埼玉県朝霞市三原4-13-81

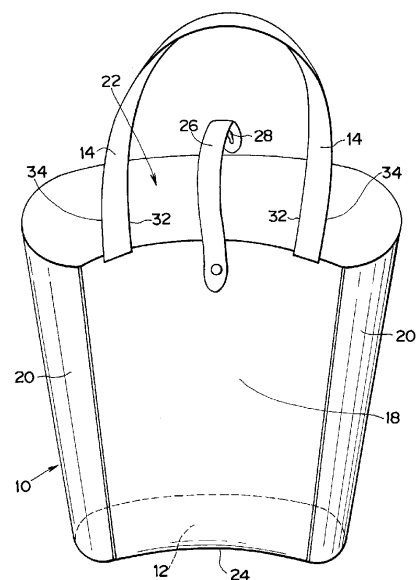
(54) 【発明の名称】 バッグ

(57) 【要約】

【課題】 体と面で接触して、持ち運ぶ際の揺れの発生を防止できるバッグを提供するものである。

【解決手段】 バッグの胴部10のうちの一部である後胴18を、外力を除去した場合に元の形に戻ろうとする剛性のある素材で形成する。この後胴18の上部に、外力を除去した場合に元の形に戻ろうとする剛性のある素材から成る帯状の取手14の両端を離れた位置に固定する。バッグの持ち運び時に取手14を裏返すことによって後胴18が内側に湾曲し、後胴18が体にフィットする形状となる。

【選択図】 図1



【特許請求の範囲】**【請求項 1】**

内部空間を形成する胴部並びに底部と、前記胴部に固定される取手とを有するバッグにおいて、前記胴部の一部を外力を除去すると元の形に戻ろうとする素材で形成する後胴とし、前記取手を外力を除去すると元の形に戻ろうとする素材から成る 1 本の帯状のものとし、その 1 本の帯状の取手の両端を前記後胴の上部に固定することを特徴とするバッグ。

【請求項 2】

前記底部における前記後胴と連結する縁をその両端より中央側の位置が内側に向けてへこんだ形状とすることを特徴とする請求項 1 記載のバッグ。

【発明の詳細な説明】**【0001】****【発明の属する技術分野】**

本発明は、バッグに関するものである。

【0002】**【従来の技術】**

従来から、ハンドバッグや肩掛けバッグ等のバッグが知られている。バッグには、外力を除去した場合に元に戻ろうとする性質を有する剛性のある皮革や合成樹脂等の素材が使用されているものがある。素材に剛性のある皮革や合成樹脂等を使用するのは、胴部が型崩れしないバッグを作るためである。

【0003】**【発明が解決しようとする課題】**

剛性のある皮革や合成樹脂等を素材とするバッグにおいては、内部空間の体積を大きくするために、その胴部は平面状態や外側に膨らんだ状態に形成されている。剛性のある皮革や合成樹脂等で作ったバッグを例えば肩に掛けた状態で持ち歩くと、バッグの胴部が平面状態や外側に膨らんだ状態となっており、体も外側に膨らんでいるため、体とバッグとは直線で接触する。このため、バッグを持ち歩くと、バッグが体との接触線を中心に揺動して、バッグが安定しないという不具合があった。

【0004】

本発明は、体と面で接触して、持ち運ぶ際の揺れの発生を防止できるバッグを提供することを目的とする。

【0005】**【課題を解決するための手段】**

本発明に係るバッグは、内部空間を形成する胴部並びに底部と、前記胴部に固定される取手とを有するバッグにおいて、前記胴部の一部を外力を除去すると元の形に戻ろうとする素材で形成する後胴とし、前記取手を外力を除去すると元の形に戻ろうとする素材から成る 1 本の帯状のものとし、その 1 本の帯状の取手の両端を前記後胴の上部に固定するようにしたものである。

【0006】

本発明に係るバッグは更に、前記底部における前記後胴と連結する縁をその両端より中央側の位置が内側に向けてへこんだ形状とするものである。

【0007】**【作用】**

後胴の素材を、外力を除去した場合に元の形に戻ろうとする剛性のあるもので形成する。この後胴の上部に、外力を除去した場合に元の形に戻ろうとする剛性のある素材から成る帯状の取手の両端を固定する。取手を裏返すことによって、裏返した頂点を中心に取手に平面に戻る力が働き、その力が後胴の上部に固定した取手の両端に働き、その力によって後胴の横方向の中心が内側に突出する方向に湾曲する。この湾曲によって、バッグを持った時に後胴が体にフィットするので、バッグが揺れなくなる。

【0008】**【発明の実施の形態】**

10

20

30

40

50

次に、本発明を図面に基づいて説明する。

図１は本発明に係るバッグの使用状態における背面方向からの斜視図、図２は図１の反対方向からの斜視図である。バッグは主に、胴部１０と、底部１２と、胴部１０に固定する取手１４とから成る。胴部１０は、前胴１６と、後胴１８と、前胴１６と後胴１８とを連絡するための２個の側面胴２０とから成り、これらの前胴１６と後胴１８と側面胴２０と前記底部１２とで、内部空間２２を形成する。ここで、後胴１８とは、バッグを持った時や肩に掛けた時に体に接触する胴部１０の箇所（体に近い箇所）のことであり、前胴１６とは、バッグを持った時や肩に掛けた時に体から一番離れる胴部１０の箇所（体に遠い箇所）のことである。

【０００９】

本発明では、取手１４は１個を備えるものであり、その１個の取手１４は帯状とし、その帯状の取手１４の両端は後胴１８の上端付近に縫製等によって固定するものである。後胴１８の素材や取手１４の素材は、外力を与えると曲がるが、外力を除去した場合に元の形に戻ろうとする剛性のある素材とする。後胴１８や取手１４の素材は、皮革や合成樹脂が望ましいが、それに限るものではない。底部１２と前胴１６と２個の側面胴２０も、後胴１８や取手１４と同じ素材で作るのが望ましいが、それに限るものではない。本発明では、帯状の取手１４の両端を後胴１８の上端付近に固定した状態においては、取手１４に元に戻る力が働いて、その取手１４の元に戻ろうとする力が後胴１８に及ぶようにする。

【００１０】

底部１２において後胴１８と連結する縁２４は、その縁２４の両端から中央部に向かうにつれて徐々に内側（内部空間２２側）にへこむような円弧形状とする。図１に示すように、後胴１８の外面上部には連結用バンド２６の一端が固定されている。この連結用バンド２６の自由端付近には、掛け止め用穴２８が形成されている。図２に示すように、前胴１６の外面上部には、前記掛け止め用穴２８と嵌合するボタン３０が固定されている。前記連結用バンド２６の掛け止め用穴２８をボタン３０に掛けることにより、前胴１６の上部と後胴１８の上部とが連結用バンド２６を介して連結され、前胴１６の上部と後胴１８の上部とがそれ以上開かないようになる。連結用バンド２６の固定手段は、これに限るものではない。なお、前胴１６に連結用バンド２６の一端を固定し、後胴１８にボタン３０を固定するようにしても良い。

【００１１】

図１の状態は帯状の取手１４の上端を使用状態に折り返したものであり、図３は取手１４を使用状態に折り返す前の状態を示したものである。本発明に係るバッグは、帯状の取手１４を折り返す（裏返す）ことによって、図１の状態と図３の状態とに容易に変わることができるものである。図３に示すように、帯状の取手１４の両端が後胴１８によって固定されることによって、剛性のある帯状の取手１４はアーチ状となる。アーチ状の取手１４は、両端付近は後胴１８と平行（後胴１８に固定されているため）になり、アーチ状の取手１４の頂上部は取手１４の両端とは振れた状態となり、その頂上部の横幅は後胴１８に固定された両端と直角方向になる。平らになろうとする力が働く帯状の取手１４の両端は後胴１８に固定されているため、後胴１８に帯状の取手１４の平らになろうとする力が働く。即ち、図３の状態においては、取手１４の内側縁３２は外側縁３４に対して外に開こうとする力が働く。このため、後胴１８の上縁は、中央になるほど外側に膨れる円弧状となる。この結果、図３の取手１４の状態では、胴部１０の上縁は、前胴１６と後胴１８と２箇所の側面胴２０とから成る楕円形状となる。

【００１２】

バッグを持ち運ぶ際には、図３の状態から、帯状の取手１４を裏返して図１の状態にする。この図１の状態では、図３では取手１４のアーチ形の頂上において下側に位置した面が、裏返って上側に位置するようになる。剛性のある素材から成る帯状の取手１４を裏返すことによって、取手１４には取手１４を裏返した状態で平らになろうとする力が働き、その力が取手１４の両端にかかる。この結果、取手１４の内側縁３２は外側縁３４よりも内側に開こうとする力が働く。これによって、後胴１８の上縁は、その中央が内側に突出さ

10

20

30

40

50

せられる（図１）。

【００１３】

前述したように後胴１８の下縁２４は中央位置が内側に突出する形状となっている。取手１４を図３の状態から図１の状態に裏返すことで、後胴１８の上縁を内側に突出させる力が働く。このことから、後胴１８では上端から下端に至るまで、図４に示すように、横方向の中央位置が内側にへこむ形状となる。なお、後胴１８（前胴１６）や側面胴２０の裏面には見付３６を取付けても良い。この後胴１８のへこみ形状は体の膨らみ形状と合致し、バッグと体とが面で接触することになる。この結果、バッグの持ち運び時にバッグの揺れを少なくすることができる。

【００１４】

なお、底部１２と後胴１８とを連結する縁２４を直線形状としても、取手１４の平らになろうとする力によって、後胴１８の上方から縁２４に至るまでのほぼ全域において、横方向の中央位置が内側に突出する形状とすることができる。しかし、横方向の中央位置をより確実に内側に突出させるために、底部１２と後胴１８とを連結する縁２４を内側に突出する形状とする方が望ましい。その他に、胴部は、前胴１０と、後胴１２と、２個の側面胴１４から構成すると説明したが、取手２８を取付ける後胴１２以外の胴部は、それらを一体に構成するようにしても、更に多数の分割した部材から構成するようにしても良い。

【００１５】

【発明の効果】

以上説明したように、本発明に係るバッグによれば、取手の上端を裏返すことで後胴を内側に曲げることができ、バッグの後胴を体にフィットできる形状とすることができ、バッグを持ち歩く際にバッグが揺れることを防ぐことができる。

【図面の簡単な説明】

【図１】本発明に係るバッグの使用状態における背面方向からの斜視図である。

【図２】図１の反対方向からの斜視図である。

【図３】本発明に係るバッグの取手を折り返していない状態における背面方向からの斜視図である。

【図４】使用状態における胴部の要部断面図である。

【符号の説明】

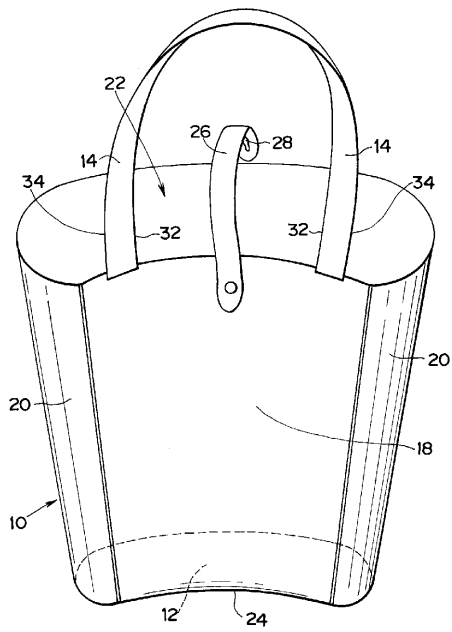
- １０ 胴部
- １２ 底部
- １４ 取手
- １８ 後胴
- ２２ 内部空間
- ２４ 縁

10

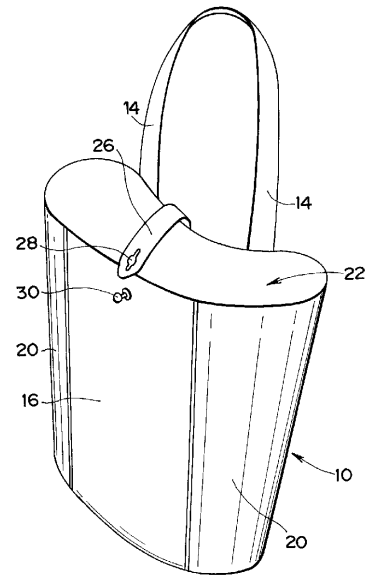
20

30

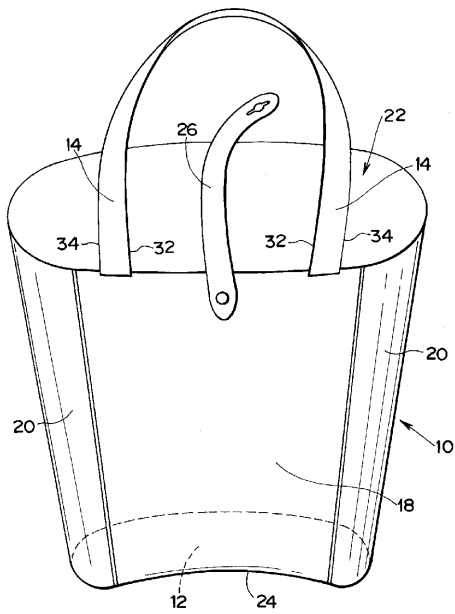
【図 1】



【図 2】



【図 3】



【図 4】

